

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

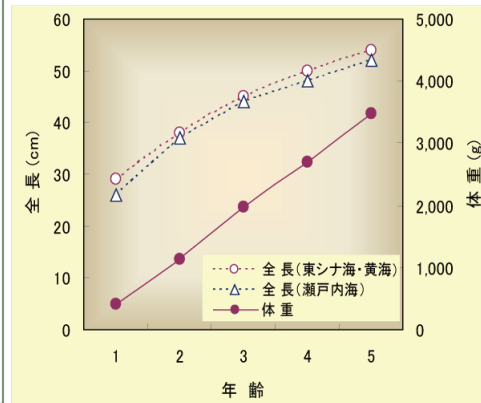
系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所
西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 10歳
成熟開始年齢： 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場： 春期(3～6月)、秋田県天王町沿岸、能登島、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸
索餌期・索餌場： 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海
食性： 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降はエビ・カニ、魚類等
捕食者： 不明

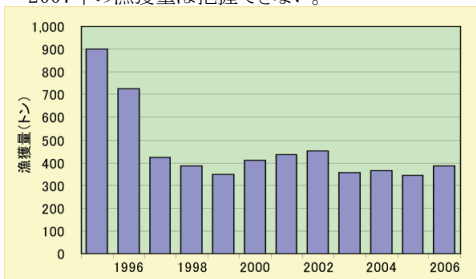


漁業の特徴

産卵場周辺においては、3～6月に2歳魚以上が定置網、釣りおよび敷網によって漁獲され、成育場周辺においては、7～1月に0歳魚が定置網、小型底曳網、釣りおよび延縄によって漁獲され、沖合や水道域においては、12～3月に0歳魚以上が延縄によって漁獲される。

漁獲の動向

長期間の漁獲量は日本海、東シナ海および瀬戸内海西部でのみ把握され、1980年代までは900～1,300トンで推移していたが、1990年代になると激減し、1997年以降は1989年以前の約10%で推移し、2007年は150トンであった。本系群の漁獲量は、1995年の900トンから1997年の423トンに半減後、横ばいに推移し、2006年は387トンであった。2007年の漁獲量は把握できない。

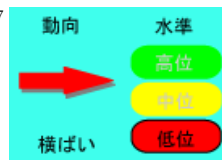


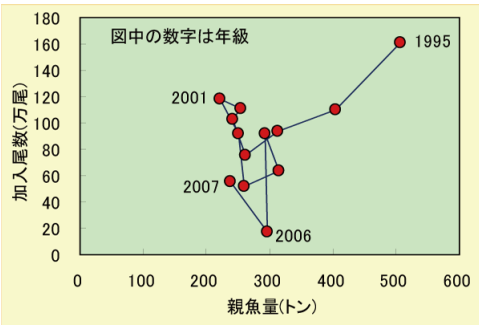
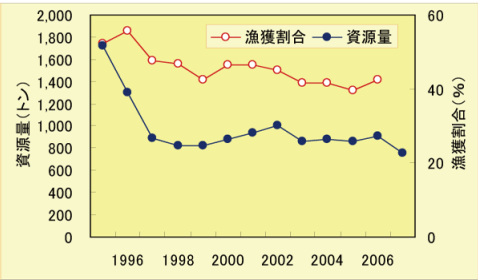
資源評価法

1995～2006年の資源量は、日本海および東シナ海と瀬戸内海における年齢別漁獲尾数を合算し、自然死亡係数を0.25としてコホート解析により推定した。2007年の資源量は、2007年も各年齢の漁獲係数が2006年と等しいと仮定し、2006年を起点にコホート解析の前進法により推定した。

資源状態

資源量は1995年の1,720トンから1997年の887トンに半減後、平均887トンで推移し、2007年は756トンと推定された。現状の漁獲係数は資源管理基準を上回っていることが示された。1999年以降、親魚量に対する加入尾数の変動が大きく、2006年は際立って低いと推定された。人工種苗の添加効率は0.12と推定され、資源量を底上げしていると考えられる。

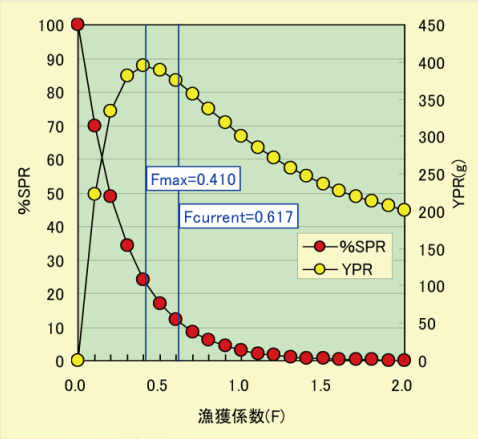




管理方策

全ての年齢が漁獲対象であるため、全ての年齢の漁獲努力量および漁獲量を低下させ、資源量を回復させる必要がある。人工種苗放流は資源量の底上げに貢献していると考えられ、今後の知見の蓄積により、放流効果の更なる向上が期待される。また、一つの資源を広域で利用していることから、広域の連携によって資源の管理を行う必要がある。

	2009年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	172トン	0.8F30%SPR	0.27	23%
ABCtarget	142トン	0.8・0.8F30%SPR	0.22	19%



資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、横ばい
- 1999年以降、親魚量に対する加入尾数の変動が大きく、2006年は際立って低いと推定された
- 人工種苗の添加効率は0.12と推定され、資源量を底上げしていると考えられる

管理方策のまとめ

- 全ての年齢の漁獲努力量および漁獲量を低下させ、資源量を回復させる必要がある
- 人工種苗放流は資源量の底上げに貢献していると考えられ、今後の知見の蓄積により、放流効果の更なる向上が期待される
- 一つの資源を広域で利用していることから、広域の連携によって資源の管理を行う必要がある

資源評価は毎年更新されます。